広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本語日本文化を語る ： 文化の継承・発展・創造の視点から
Author(s)	朴, 紅海
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 16期 : 107 - 114
Issue Date	2002-03-29
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038896
Right	
Relation	

日本語日本文化を語る

ー　文化の継承・発展・創造の視点から　ー

朴 紅梅

Ⅰ．序 論

人間が生活しているところには、常に文化がある。その文化は人間の生活とどのように関わっているのだろうか。伝統的文化には積極的に継承していかなければならない面と、克服しなければならない面とがある。また、世界の諸地域の文化との交流をはかって、新しい文化を創造していくことも大切なことである。現代の私達は、発達した科学技術や情報の洪水の中に生きているが、この現代文化を、いかに受け止め、私達の生活をいかに営むかということもまた、現代に生きる私達の文化的課題である。これからも長い人生を生きていく私達は、このような時代に人間として生きていく根本的な心構えを、今、はっきりと見定めなければならない。文化の問題をそのような視点から考えてみることは大切なことである。

Ⅱ．本 論

１：文化の概念について

人類は長い歴史の中で、諸地域のいろいろな文化を創り出した。文化は人間と他の動物を区別する一番重要な部分である。

１９２０年、インドの森林の中で、おおかみに育てられた子供が発見された。生まれてからすぐおおかみの中で育ったため､性質とか行動はおおかみと全く同じだった｡ふつう、人間の子供だったら順調に人間に成長できるのだ。人間社会で人間としての生き方を学びながら育つからである。インドで発見された子供はかなり不幸な例であるが、人間らしい生活の仕方が文化であるだろう。

原始人は直立して歩行し、小石をうちかいた石器を使っていた。人間を道具を作る動物として他の動物から区別できる。道具をつくるということは、自然のなかのものを、意識的に直すことである。つまり自分達の目的を遂げようとすることである。人間以外の動物は、環境の一部として、環境に順応して生きるが、人間は環境に順応しながらも、自分の需要を満足させるために、環境に手を加え、新しい環境を作り出そうとしている。

人間は道具を作るだけでなく、また言語を持っている。人間以外にも言語に似ているものを持っている動物がいるが､それはただその時の感情を､そのまま表したのにすぎない。これに対して、人間の言語は過去や未来のことについても表すことができる。このような

言語は人間だけのものであり、人間は言語によって複雑な感情や意志、学習の成果を伝え合うことができるのである。

道具の制作や言語活動が頭の発達を促し、それによってさらに道具や言語が発達し、人間の生活はもっと豊かになり、複雑になった。人間は言語を使って、直接相手に話すだけでなく、遠く離れたところにもいろいろな内容を伝えることができる。更に文字が発明され、このことはいっそう顕著になった。言語を持っている人間だけが、学習の成果を後代に伝達し、この社会をもっと豊かにすることができるのである。

それでは、文化とはいったい何であろうか。人間が自然から自立した自らの世界を作り出す活動と、この活動によって作り出されたものをあわせて文化という。人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果。衣食住をはじめ技術、学問、芸術、道徳、宗教、政治など生活形成の様式と内容とを含む。文明とほぼ同義に用いられることが多いが、西洋では人間の精神的生活に関わるものを文化と呼び、技術発展のニュアンスが強い文明と区別する。人間としてもっと豊かな生活を送る為に、人間にとって有意義なものを作り出すことを目指している。長い歴史を通して人間が作り上げ、受け伝えて蓄積し、集団の共有の財産としてきた、人間らしい生活のあり方が文化である。

また、人間は自然環境の中で働きながら生活するだけでなく、人と人のコミュニケーションをもっと円滑にしようとしている。さらに人間の内面的な心をもっと豊かいしようとする。文化とは、このような人間のあらゆる生活の領域に関わるものである。

２：世界の各地域の文化と交流

（１）文化の多様性と個性

古代には四大文化が出現した。つまり、エジプト文化、メソポタミア文化、インダス文化、中国文化の四つを指している。これらの地域に、いずれももっとも個性的な文化が生まれ、これらの文化の交流と競争の中で、だんだん優れている人類の文化が形成されてきたと言われる。しかし、この四大文化に限らず、人間の住むところには、それぞれ個性的な文化が形成され、伝えられてきたことに留意しなければならない。

文化の基本的なものの一つである言語についてみると、世界には、主なものでも約３０００の言語がある。人々はそれぞれの言語を使って、交流を行い、生活をもっと豊かにしていく。住居や衣服も、食べ物や食事の作法も様々である。三大宗教と言われるキリスト教、イスラム教、仏教についてみても、地域によってその受け取り方が異なっている。また、三大宗教の他にも、世界の各地で、様々な神が信仰されているのである。

世界の各地域の人々は、それぞれ異なった環境との関わりの中で、人間としてのよりよい生活を求めて発展させ、これを子孫に伝えてきた。子孫は伝えられたものをふまえて、さらに新たな創造を積み重ねてきた。したがって、諸地域の文化は、それぞれ固有の背景をもって多様であり、個性的である。

地球上のどの地域においても、そこに人間が住む限り、様々な文化が形成されてきた。それらはいずれも、そこに住む人間にとってかけがえのないものである。発展途上にある地域の人々の文化についても、人類の文化の一つとして尊重しなければならない。

文化の個性の尊重は、日本人が日本の伝統的な文化に対する場合でも同じことである。日本の文化を人類のかけがえのない文化の一つとして継承し、より豊かに創造していくのは日本人以外にないのであり、日本の伝統的文化を大切にすることは日本人に課せられた重要な任務であると思う。

（２）日本の文化交流について

日本の文化をより豊かに創造するためには、他国の文化をより積極的に吸収することに努めなければならない。また、日本の文化の「よさ」を、外国の人々に理解してもらうように努めることも、人類の文化の発展に貢献することになるであろう。

交通と通信技術の発達によって、今世界はますます狭くなりつつあるが、やがて一つになるときがやってくるに違いない。しかし、このことは、世界の各地域の文化が個性を失い、一つの文化で世界が統一される時代が訪れるということを意味するのではない。むしろ、互いに個性を尊重しあい、交流に努め、互いの良さを理解、吸収しながら、それぞれの文化の個性をよりいっそう高めていくことが、今日における人類全体の課題であろう。

日本の文化は、大陸（インド、中国、朝鮮など）の文化を積極的に取り入れて成長してきた。漢字を借りて初めて日本語をしるすことを学び、その制度を学んで国家の体制を整え、儒家、道家の思想や仏教を学んで、思想的視野を著しく広げてきた。また、明治維新前後からは、西ヨーロッパ諸国の近代文化を積極的に吸収してきたと言える。しかし、その間には、外国文化の受容に消極的な姿勢を示した時期もあった。９世紀末に遣唐使を廃止したことや、１７世紀前半に鎖国令をしいて、ほとんど外国との交流を絶ったことなどがそれである。

このように、日本の中に閉じこもった時期には、外国から新しく刺激を求めず、それまで受容した外来文化を消化しながら、日本の風土の中に育てられてきた日本的なものを、みごとに開花させることにもなった。例えば、遣唐使廃止と相前後する時期に、日本語を自由に表記する仮名文字が発達し、やがて物語文学が生まれたことなどは注目される。しかし、外国の文化への消極的な姿勢は、一面において、日本文化の停滞の危険を孕んでいた。特に近世の鎖国は、政治的な危険感、さらには経済的、宗教的理由によるものではあったが、すでに交流し始めていた西ヨーロッパ諸国との関係を閉ざし、多くの日本人の視野を狭めることになった。そのために日本は、西ヨーロッパ諸国の近代化の動きから大きく立ち後れることになった。

また、島国に生きてきた日本人は、日常生活の場で外国人と接することがほとんどなかった。外国の文化に接すると言っても、主に書き物や芸術作品を通してのことであって、

日本人とは異なる人々の感じ方、考え方を、生活の場で身をもって実感することがなかった。したがって、外国の学問や芸術や制度を受容しても、生活の中に流れる基本的な感じ方や考え方は、過去の伝統がそのまま継承される傾向が強かった。また、外来文化も国民の間に広く浸透するにしたがって、この伝統によって日本化される過程を辿った。

これからの日本人は、自らの伝統的な文化の個性を自覚しながら、外国の文化に対して積極的な関心を持ち、伝統的な文化と外国の文化との厳しい対決の中に、新しい日本の文化を創造して行かなければならないと思う。

３：日本の伝統文化について

（１）生活文化

私達はまた、古典と呼ばれるものが文化ではないことも理解しなければならない。日常生活の場で、あまり意識することなく従っている風俗や習慣も、日本の文化である。

食事を例にとると、日本人は、箸と茶碗でご飯を食べる。普通には、ナイフとフォークを使ったり、直接手で食べたりしない。日本人の生活の基盤には、このようなしきたりがあり、日本人の生活を支えている。それは、様々な変遷をへて、祖先から伝えられたものである。

正月や盆の行事、四季の祭り、婚姻や葬礼の習俗などの中にも、日本人の生活感情や人生に対する理解が込められている。例えば、冬の祭りは、新鮮な生命力を満たすためのものであり、正月の行事もその一つである。春の祭りは、その年の豊作を祈願したものである。また夏の祭りは、疫病や風水害を払うためであり、秋の祭りは、実りを神々に感謝したものである。このように、日本の祭りは、もともと豊耕を中心とする集団生活のリズムの節々をなすものであった。そこには祖先の霊や神々に対する信仰が示されており、また、祭りの行事をとおして、楽しみの中に人々の結合をはかるものであった。

現代人の目からみて、改善すべき点は改めなければならないが、このような習俗や行事を愛情をもって受け伝え、そこに祖先とのつながりを感じ取り、日本人がお互いに理解を深め合うことは大切なことである。

（２）日本における自然と文化

日本人の生活の中にある自然を考えてみると、生活のあり方と言語のあり方、更には文化一般のあり方との関連が、よりいっそう理解されよう。

日本は、突如として猛威をふるう台風にしばしば見舞われる。人々の生活は、台風がもたらす洪水により、繰り返し破壊されてきた。しかしその反面、台風は豊かな水をこの国土にもたらして、動植物の生育を促したのである。人々にとって台風は、恐ろしいものであったが、しばらく堪え忍んでいれば、豊かな生をもたらすものであった。また、四季の移り変わりがはっきりしているために、四季にはそれぞれ異なる趣がある。『枕草子』に

も、四季それぞれの趣を、「春はあけぼの」、「夏は夜」、「秋は夕暮れ」、「冬はつとめて」と述べられている。日本人はこのように、自然に従えば豊かな生が得られると理解し、また、自然に従いながら豊かな生を味わって生きてきたのである。

砂漠に生きる人々が、自然との闘いの中で生きてきたこと、あるいはヨーロッパ人が、適度に手を加えれば人間に従順となる自然の中でいきてきたことと比較すると、日本人の自然への関わり方の特色が理解できるのである。

日本人の創造してきた文化は、自然と闘ってきた人々や、従順な自然を支配してきた人々の文化とは、基本的な性格において異なる。日本の文学としてももっとも特色のある短歌が、花鳥風月をこのんで詠み、俳句には季語が読み込まれるように、日本人は、自然を愛し、自然と一体となった情感に生きることを求めた。さらに、日本人にとって自然は、宗教的な慰めや救いを求めるものでさえあった。桜の花が満開の頃に、その花の下で死にたいと願う「願はくは花の下にて春死なん　そのきさらぎの望月のころ」という西行の歌や、「造化にしたがひ造化にかへれとなり」という芭蕉の言葉などに、この宗教的な自然観がはっきりと示されている。

能舞台の背景には、一本の老松が描かれている。人間のあらゆる営みは、この老松の前で演じられる。世上の栄枯盛衰のざわめきのはてに、ただ聞こえるのは松風の音だけであるという理解を示したものであろう。人間のはかなさに対して、自然の永遠性を示すものと言える。「夏草やつはものどもが夢のあと」（芭蕉）ととらえられた自然も、この自然であろう。明治時代の自然主義文学が「大いなる自然」といったのも、この伝統を受け継いだものである。

自然に従うと言う姿勢は、自然の様々な様相をそのまま受け取ることであって、自然を合理的に支配する姿勢とは異なる。この違いは、庭園芸術によく示されている。

日本の庭園は、ヨーロッパの庭園のように規則正しい人工的な秩序のなかに自然を取り入れたものではなく、自然そのものの中に、自然の純粋な姿を探求したものである。それは、あくまでも人工であるが、自然に従う人工である。ここでは規則正しさではなく、様々な性質や形をもつ木々のつりあいが追求されている。

日本の絵画が求められたものも、このようなつりあいであった。聞き進むにつれて変化し、しかもそこに統一のある絵巻物、空白を利用する水墨画などがその代表的なものである。なお、ヨーロッパの皿や茶碗の規則正しい模様に対する、日本の器の一見とりとめなく見えながら見あきない妙味もまた同じである。

このように日本の美術は、幾何学的な規則正しさや破綻のない形態よりも、むしろ自由な不均衡や動きのある統一に特色がある。これらはみな、日本人の自然に従う生き方の中で作られたものである。

（3）日本語とその特色

日本語の性格の中にも、日本人の感じ方が秘められている。日本語には主語のない文が多い。見ず知らずの人に事実を正確に伝えようとすれば、主語を明確にする必要がある。しかし、親密な生活を長い間ともにしてきて、何もかも分かり合っているような集団のなかでは、あることを話題にするときに、ことさら、私が、誰が、などと言わなくても、それが誰を意味しているかの見当がつくであろう。日本語は、主に限られた地域の親しい集団を母体として使われ発達してきた言語であるために、主語がないことが多いのである。また日本語は、敬語に示されるように、互いに関係に即した言葉が発達してきた。「あげる」「さすあげる」の使い分け、「もらう」「いただく」の使い分け等がこれに当たる。このように使い分ければ、主語を明示しなくても意味が通じる。狭い範囲の親しい人間関係の中では、「さしあげた」と一言言えば、その人が誰にさしあげたのか、その敬語の使い方で十分理解されるのである。主語の省略と敬語の発達は密接に関わり合っている。

日本人は、山などで区切られた平野や盆地などに分かれて住み、稲作を営んで狭い「むら」に土着して生活してきた。そのために、人々の交流は狭い範囲の「むら」に限られることが多かった。また日本人は、島国に生きてきたために、異質な文化との厳しい対立を、日常的な生活の中で体験することがなかった。外国人が移住してきても、母体となる日本人の人間関係の中に、次第に吸収されていった。日本語の性格は、主にこのような日本人の生活のありかたのなかから形成されてきたのである。

（4）純粋さの尊重

日本語の特色をとおして、日本人が抽象的にものごとを考えることにおとり、人間関係に対する感受性が鋭いことを分かった。また文学の面で、日本人は自然を合理的にとらえるよりも、不均衡の中につりあいを直感的にとらえる点に特色があることも分かった。このような特色が人間の生き方についての理解に、どのようにあらわれてきたか。

日本人の生き方の特色は、一言で言えば、心情の純粋さをひたすら尊重することである。これは、歴史始まって以来今日まで、基本的に変わらない特色である。優れた思想や文化を残した諸民族が、歴史のはじめから、常に従わなければならない客観的な規範を考えていたことと比較すると、このことはよく理解できる。例えば、ユダヤ人は、神ヤハウェの定めた掟（律法）を考えた。ギリシア人は、宇宙を支配する法則（ロゴス）を考えた。インド人は、宇宙いっさいのあり方を貫く理法（ダルマ）を考えた。また中国人も、宇宙や人間を貫く道を考えた。彼等は、このような客観的な規範や宇宙のあり方を踏まえて生きることが、人間としての正しい生き方であると考えた。しかし、日本人には、宇宙を貫く規範や秩序を考えようとする姿勢が生まれにくかった。

このような日本人の生き方の特色も、日本人の生活環境や共同体のあり方と関わりの中で生まれてきたものである。異なった文化をもつ人々がともに生活しようとすると、秩序を保つよりどころとして、いつでもどこにでも通ずる規範を求めないでいられない。しか

し、代々生きてきた「むら」の生活では、その必要が感じられない。また忍従を求める自然の前では、合理的に物事を処理しようとする姿勢は生まれにくい。

（5）誠の伝統と現代の課題

誠の強調は明治以後にも受け継がれた。西洋哲学を学んだ西田幾多郎は、『善の研究』で、善とは、自己の内面の様々な要求を統一して、もっとも厳粛な内的要求に生きることであると説明した。彼は、このもっとも厳粛な内的要求に生きることを誠と考えた。また、人々との関わりの中で、その関わりを考えながら誠に生きれば、それがとりも直さず人への愛で善を理解した。

今日においても、生きていくうえでもっとも大切なことは、誠実であることと考えている人が多い。それにも関わらず、人間は建前と本音を使い分けるなど、誠実とはいいがたい行動をしばしばとっている。誠実であることは容易なことではないが、心情の純粋さを追求してきた伝統を受け継ぎ、誠実に生きることに努めなければならないであろう。しかし同時に、人間は、つねにより正しい生き方を求めることを忘れてはならない。誠実でさえあればよいのかとも考えなければならないであろう。それには、他の国の人々が、正しい生き方として何を求めて来たかを知る必要がある。たとえば、西洋において強く自覚されてきた人格の尊厳の思想や、普遍的な規範を求める生き方などから、学ぶべきことは多いであろう。

Ⅲ．結論

私達は、これまでのどの時代の人々とも違った文化的状況のもとに生きている。現代社会は情報化社会とも言われているが、豊かな物質文化と量産された画一的な文化とに象徴される社会であり、変化の急激な社会である。このような現代社会に生み出された文化には様々な問題があるが、とくに伝統的文化は継承されず、前衛的文化がひたすらのびている。様々な伝統文化は、マスメディアを通じて伝えられ、そのことで生命を保っている場合が多い。しかし、マスメディアから送られる情報は、できるだけ多数の人々の関心を引き、しかも商品価値の高いものであることが要求される。関心を持つ人々が限られていたり、特定の地域の人々を担い手として伝承されて来たりしたような伝統的文化は、マスメディアに乗りにくいものが多い。同じ意味で前衛的文化は、例え創造性に富んだもとであっても、マスメディアでは扱いにくい。このような文化の現状は、決して好ましいものではない。私達は、現代文化を特徴付けるマスコミュニケーションのありかたに批判の目を向け、それを改善していく方法を考える必要がある。

本論で語ったように、日本の伝統的文化は日本という国全体の姿であり、今の日本社会の宝物である。伝統文化を失うことは、自分を失うことと同じことである。自分を失ったら、すべてを失い、本当の生き方とは言えない。

日本伝統文化には、日本人の個性的な感じ方や考え方が豊かに表現されている。日本人は祖先から伝え合れてきた伝統的文化を深く理解しなければならないが、それは伝統的文化の世界に埋没することではなく、伝統的文化の素晴らしさを十分受け継ぎながら、そこを出発点として新しい文化の創造に努めることを意味している。

Ⅳ．おわりに

去年の十月、日本語日本文化プログラムで日本に来たばかりの時、一年の研究計画を出して下さい、と指導教官の深見先生がおっしゃった。初めて日本に来た私なのに、そう言われて、いったい何を研究するか、見当も付かなかった。日本語日本文化のプログラムだから文化を研究してみようという幼稚な考え方で、いきなり「日本の伝統文化から現代文化まで研究したい」と書いて出したけど、自分が本当に日本文化について研究できるかできないか、はっきり言うと自信がなかった。中学校から日本語を勉強してきて、もう十年になったが、未だに一つのことについて研究なんかしたことがなかったのである。

しかし、一年が経った今、自分がいつのまにか日本文化に関心を持ち、日本文化を身に付けたことに気付いた。日本に来たばかりの自分と比べてみたらずいぶん物知りになったような気がする。もちろん、たった一年で日本文化の研究をして、レポートを書くということは、いずれにしても未熟なことである。前に書いてる文章も「胡椒の丸呑み」のように、外見のものだけ語って、奥の所までにはまだ行ってないと思われる。でも、見ず知らず自分が一年間の歳月で、日本文化に近付いていき、また日本語でレポートを書くということは、私自身にとってはかなり喜ばしいことである。「百聞は一見に如かず」という諺のとおり、この一年間の日本滞在を通して、今まで知らなかった日本文化を体験し、私にとって非常に有益だった。これらは、また私の将来の道を広げるための始まりであり、支えになるに違いない。

日本にいる間、勉強や研究の面で、私のような者をひきたてて、励まし導いてくださった広島大学の先生方々に感謝の気持ちが一杯であり、ご恩に対して、どのように報いれば良いか私にはまだ分からない。ただ、一生懸命にこのレポートを書いて、皆様に感謝の気持ちを伝えたかったのである。未熟な点が一杯あると思うが、皆様の厳しい批評を期待し、今後ともずっと見守っていただきたい気持ちである。